

教員生活 42 年の反省と分析—大学の閉塞性—

第一回 学生の状況と感想

はじめに

筆者は故井尻正二会員の門を叩き大学での生活をはじめて以来 40 年余で定年を迎えた。しかし、大学での後半 20 年余りは筆者にとっては驚きと困惑の連続であった。

「なにかへんだ？」と感じたのはいつ頃だったろう。「勉強の仕方がわからない」、度を越した学生間の虐め、教室がざわめく、まったく本来の大学の学生とは違う姿をみた。いやはや教員（素知らぬふりか？）はプリント配布とパワーポイント一本槍、パワハラ、セクハラ等々、その上盗作やデータ改竄などが身のまわりで起きはじめた。そして数値化による評価、学会もおなじで議論が萎えパフォーマンスに頼るのみだ。このようななかで手を尽くし窒息寸前へとへととなって教員を終えた。

そこで、恥を顧みず反省を含めて事実を抜きだし、原因を探り対策を練ろうというのが本文の意図である。とはいえ筆者はごくせまい世界、つまり医学部や歯学部の講座制の中での体験にもとづいている。これから触れる（とても大学とは思えない）「酷い事実」について、諸賢から「知っているよ」「愚痴だ」「辟易する」「個人の感情」あるいは「やる気を損なう」という謗りや叱責を受けるだろう。しかし、事実は資料であり（同じ体験を多くの友人からも集めた）変えようがない、事実を噂のたぐいで流すのは筆者にはできない。否、形式に拘り事実を率直にぶつけあわない近頃の風潮に筆者は怒りすらおぼえる。本稿を、「ひらの教授」（今野 2013）「ただの教授」（筒井 2000）の類とせず、大学の研究と教育が前進するための糧としたい。

紙幅の都合で、学生の状況、教員と大学、学会の問題（以上が資料）、分析、さらに筆者の対処法へと 4 部に分けた。ご批判、ご意見をたまわれれば望外の幸せである。

1 学生が変わった？（学生の状況）

「大切なところはどこですか」、試験後の「回答を教えてください」はまだいい、「勉強の仕方は？」「試験に出るのはどこですか？」という驚くべき学生の究極的質問。これに連動して教室が落ち着かなくなった。平気で遅れる、来ない、来てもゲームをするか化粧をする、睡眠をむさぼるのはよい方だ、私語を目前で注意すると「話していません」（驚くべき厚顔無恥！）等々。果ては授業中にうろうろ歩き回る。瓶や缶、ゴミを机の上や中、足下にやたら置く、だから教室がすごく汚れる。授業のはじめにゴミを捨てるよう指示したら、大きなゴミ箱が一杯になってあふれた！自分の教室すらきれいに使えないのだ（図 1、家庭でどのような躰をしているのだろうか？）。



図1 かんかん捨てる！

筆者が授業開始時に教室に入るとまず「机にあるカンカンやゴミをすてろ！」と怒鳴った（？）ため、学生の一人が卒業記念に授業用のバックに描いてくれた。これは各大学の講義で使っているため全国を旅している。

そのうえ学生同士のイジメが激しくなった。ノートや教科書を窓から捨てる、ロッカーの扉や鍵をコンパウンドで固めて開けられなくする（よくもまあこんなことに時間をかけるものだ！）、高価な機材を盗む、怪文書を回す等々まるで政治かアウトローの世界に入ったようであった（誹謗中傷の怪文書は学長、学部長、教授選挙などにもあるが・・・）。警察沙汰になったことが少ないのが幸運だった、のか。大学祭も知性がないのが多い、飲むのと食べるのに集中だ（率直、悲しい限りだ）。

集団にまともされない（大学祭、学友会、学生自治会などは下火）、友達と議論ができない、学問の話はほとんどなし、授業の内容の確認や質問に来るのはすごく上出来（嬉しくなる）。授業は（国家試験に出題される）重要な点だけ話せ！板書や大切な点はプリントで配布しろ！とくる（原因は板書を正確に写せない、描けない、図2）、そして点数にこだわる。そのあげく理解できないのは授業のせいだ、とくる。自からの努力はどうした（？）という疑問が当然おこる。このような学生はむろん成績が悪い、しかし全体が悪いので目立たないのである（真面目な成績のよい学生には申し訳ない思いである。）

「自分は答（正解？）を書いた！何故落ちるのか？」と真剣に抗議に来る学生（なんでも書いてあればよい？）、挙げ句の果てには「うちの子はこれほど酷くない。点数を開示しろ（点数だけか？開示依存症？そのくせ自分の情報はプライバシーとしてひみつだ）」と親が乗り出す。ある元帝国大学の話、実習がシラバスにある夕方5時を過ぎた（よくあるケース）、と親から学部長へ直接抗議の電話が入った（親も子にましてあきれ果てた！）。

さて余談だが、このようないわゆる「できの悪い」学生のもうひとつの傾向は優越感を持

ちたがるようである。あんなやつより上だ、と(???なにが上なのか???その狭い世界のなかで・・・)。

筆者の専門とする領域(解剖学)では、空間思考や推理力の欠如が目立ってきた、とくに驚いたことは教員も図を描けない(板書も)、そして学生も図形、立体図形、断面と立体図の関係を理解しない、できない(図2)。これは形態で理解する解剖学・外科学などにとっては深刻で致命的な欠陥なのである。

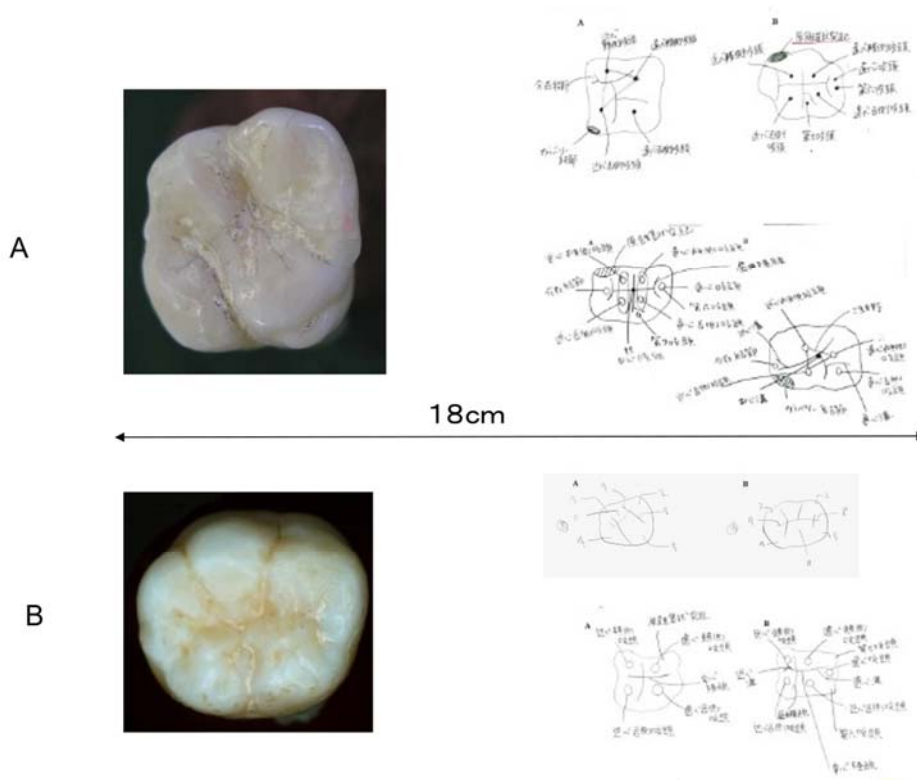


図2 右の絵がある学生の左の写真のスケッチ。欲目に見ても違う。

外観、輪郭、溝などがどうしてこのようになるのか不思議に思うであろう。このような絵を描く学生が増えている。ひどいのは咬頭として○を四つ描く学生もいる。その精神状態、そしてどうしてこのように育ったかのか、を分析しなければならないだろう。この学生達を鍛えればまともな絵が描けるようになるだろうか?という疑問を抱きつつ・・・。

だから、いきおい授業は教科書の図をコピーして Ppt に頼る、そしてプリントで配布する、このような教員は彼らにとっていわゆる優しく対応してくれる良い(?)先生となる。これに反して厳しく、教えない(自ら努力せよ!)のは酷い、悪い先生なのである。ここから見えることは、生育歴が影響しているうえ、大学での授業、試験などがいっそう効果的に追い打ちをかけている、ということである。

三次元空間思考(立体図形)、論述、証明、成長など変化のある試験問題は極端に成績が

不振である（もともと教員も問題を作れない）。唯一、暗記問題に何とか答えてくれるのみだ（悲しいこと限りない）。

総じて、教科書丸のみの暗記勉強が横行し、文章が理解できないだけでなく文字が読めない、読めないから勝手に読む、だから教科書を理解できない。言葉（邦語でも）で伝えるのが苦手（国語力と対話力の欠如）。果ては（いくら資格社会とはいえ）「国家試験に合格する授業をして！！！」と悲痛な叫びとなる。

体力と気力のレベルが低いのも顕著である。以前、球を投げようとしたピッチャーがその腕を骨折したことが話題にのぼったが、大学でも運動部のケガが確実にふえている。著者は図らずも空手部の部長をしてきた。彼らは、朝昼晩の一日3回の練習があり昼食もとれない様子で心配したが、その反面大ケガがなく、留年もない（勉強する時間がないから授業の居眠り御法度という先輩の指導）、おかげで大学別全日本選手権2位となった。その後、練習が少なくなり、いまや週2回夕方のみ、おまけでケガも増えた。親も教員も学生のケガを恐れこの様な状況に向かったようである。

学生が考えようとしめない（考えられない）、目的意識が低いなどいろいろ現象はあるが、最も肝要な点は、体力がないことである。体力がないから、集中力がない、思考力がない、これにつづいて基礎学力が低く、対話もできない、だから理解できない、という輪廻が浮かんでくる。

これに加えて、挨拶など社会生活の基本が出来ない（こんなもの大学で教える類ではない！）。リュックを背負えば後にいる人のこと、スマホゲームに興ずれば周りの人の迷惑などどこ吹く風である等々（これは大学以外でも一般的な傾向だが）。そしていまや大学は、躰からはじまり礼儀作法そして社会に出るための専門知識までを身につける場、ということになる。親にとっては有り難い話でも、学生にとっては、それだけでなく短い学生時代に、このような幼児教育から始まり専門教育まで至るのはまことに過酷な一面をもつ、ということになる。

これに反し、まともに学問を目指す学生は絶対的に少数となった。しかも、学生の中では居場所がない。座学も実習も目を見張る質問をする学生がいたが案の定イジメにあった（目立つとイジメに遭うというのは後で知った）。

医、歯、獣医、薬学部などの学生は職業が限定され比較的目標を持ちやすいと思われるにも関わらず、仮面入学、あるいは偏差値による不本意入学（先生、親のすすめ？）などで、目的意識の欠如が現れる。それだけではない、入学すれば国家試験に合格させるのは学校と教員の責任だとうそぶく学生と親がそれこそごまんという。そして、成績や授業のやり方にも口を挟もうとする親（とくに学部と同職の親に多い）。親も学生も共々優れた専門家になろうという目的も気持ちもみえない。極端に言えば目的は収入と優越感だけかのようにみえる。

「優れた科学者は優れた専門家になり得る」のである。しかし、そのための知的要求はほとんどみられない、要求がなければ充足感もない、これが現状である。このような状況は概

して国公立大学でおなじ、偏差値の高い大学ではここに挙げたような学生の比率が少ないだけなのである。

2 解決策を求めて右往左往（みんなどうしているの？）

以上に記したさまざまな現象を当初は個人的・個別的な問題だろうと感じていたが、至る所しかも日常的現象となつてはいくらにぶい筆者でも何か共通の原因があるだろうと考えざるを得なくなった。手を拱いていたわけではない。小学校から高校までの教育の各種の会議、友人との経験交流と議論、果ては就業前の保育や障害児教育のセミナー、脳や心の発育の会議などなどを渡り歩いた。そこで「光の秒速が地球七回り半することも知らない」と唾然・呆然とする教員、学習に関する動物実験の報告に対する（痛切な問題を抱えた）保育現場からの質問に「これはラットの実験です～」と、絶唱（？）する研究者とのちぐはぐさを見たのである。

しかし、このようなシンポや会議では成功例は数多く語られても、失敗例は無く、成功例でも学生に定着するのかという「体」の条件の分析はない。かくてこれらの会議の限界を感じた。そして、よい授業について三十冊くらいの本を読んだが同様であった（例えば、ケン・ベイン 2008 など）。様々な教育関係のワークショップにも参加した。しかし結論は何のことはない教員も学生も同じ目線で相互対等に議論する、と言うものであった（これは自分のやりかたと同じだった）。「青い鳥」は自分の中にいたのである。そして「よみかきそろばん」をおしえる学生支援活動を若手教員とはじめてみた。

しかし、教員の学生への認識は低い（黒板へ向かって講義しているのか？）。それゆえ、教授会で言い続けろという友人の薦め（なぜか本人は言わない？）もあり、定年まで毎回、学生の状況を発言した（定年後、当時陪席していた事務の方から「あのときは毎回話される事が分からなかったのですが、今、先生の言っていたことが非常に大切になっています」と・・・、またある教授からコザワ節が聞かれなくなって教授会が寂しい・・・と、呵呵！）。

3 それでよいのか原因究明と授業改善？

これらの学生の共通する特徴は疑問を発しないで「覚えるのはどこですか？」という受動性であり、「なぜ」「どうして」が欠落している。これは科学的な「知的欲求」とそれにつづく「知的充足感」の欠如であり、これからくる「目的」の喪失、いわゆる「哲学の貧困」ゆえに社会の風潮に左右され、狭い安心できる世界へ入り込む、「閉塞」へという流れ、が見えてくる。「知りたい！」「調べよう」という「知的探求」が原点の大学で、「科学的な知的要求の欠如」がこの状況の最たる原因なのである。換言すれば、学問の目的意識の欠如と学問は暗記（論語教育）、そして学問的な広い世界への飛翔のない与えられた閉鎖世界（＝閉塞性）である。自由に考え、率直に議論する、学び研究する面白さ（知的要求と知的充足感）の開放的志向のない学問の世界、発展のない内向的な空気を「閉塞性」「閉塞感」と言わずして何と言うのだろうか？

このような学生に対する様々な分析と授業改善は数多い（上野 2004、ケン・ベイン 2008 など）。しかし、筆者の目から見るとそれらは踏み込みが浅く対症療法的なものであり根本的な解決策だとはどうも考えられない。なぜなら大学教育を受ける側の条件が分析されず主観的なものであること、そして生育歴の分析がないことなどである（せいぜいゆとり教育がわるいと・・・）。一方、幼少期の教育で身体的条件を分析してもほとんどが脳の発育に限局される、そこに筆者は不満を持っている（体は全体で一つだ、と）。

筆者は自分なりの分析の結果これらの原因が幼少期の自然との遊び、異年齢との遊びの欠如であり、知的興味への道を閉ざす大きな要因の一つであるという結論に達した（3, 原因の分析に詳述）。これは森永卓郎（2004）の分析結果と同じものである。そして、これらが欠如している学生に対する方策は如何？その方策の根拠は？という課題が現実には迫っているのである。筆者は自分の分析に基づいて古来の教育法（「扱き（しごき）」）を行った（試行錯誤をしつつ・・・、4 の実践で記述）。

おわりに

ここに羅列したことを「嘆き」「公にすることでない」と一蹴する向きもあるだろう、否、多くの会員諸氏がそうかも知れない。そして、現実には問題が起こると対処療法に終わる、というのが筆者の受ける印象である。しかし問題の解決は事実を率直にみる＝観ることから、原因を見極め、解決の方向を見出すことであると筆者は確信している。

参考文献

今野浩(2013)工学部ひらの教授. 新潮文庫.

ケン・ベイン（高橋靖直訳）(2008)ベストプロフェッサー. 玉川大学出版部.

注、授業の改善などに関して他にも多数ある

上野千鶴子(2005)サヨナラ学校化社会. 太郎次郎社.

森永卓郎(2004)「かね」はなくとも子は育つ. 中公新書.

筒井康隆(2000)文学部唯野教授. 岩波現代文庫.